
流れ星にハーレムの祈りを

メロンパン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流れ星にハーレムの祈りを

【Nコード】

N36050

【作者名】

メロンパン

【あらすじ】

ハーレムが欲しかったあの頃！ 流れ星に叫んだものの願いはかなう筈も無かった！！そんな中三を超えた高校一年の春！！ 実は隠れオタク＋変態の聖也に奇跡が起きる！？

どう考えても馬鹿な小説ですが、たま〜に真面目な話があります。ついでに主人公が実は残念な子なので若干マニアックな会話が発生する恐れがあります。ですがわからなくても別に問題は無いと思います。

こんなアホみたいな作品ですが、応援よろしくお願いします！感想、

レビュー待ってます！

序章 新しい生活（前書き）

ハーレムが欲しかった中三の夏、流れ星に願いをこめてみたけどやっぱ無理だった。そんな俺も今日から高校生。親がいないから深夜アニメも見放題・・・って、え？もう見れないの？俺アニメ無きや死んじゃうのに・・・

序章 新しい生活

俺はハーレムが欲しかった。

だから中学三年の夏に見た流星群に向かってこう叫んだんだ。

「ハーレムが欲しい、ハーレムが欲しい、ハーレムが欲しいいいい……！！！！！！」

しかしそんなことで願いがかなえば誰も苦労はしない。

結局何かが起こるわけでもなく、平凡な日常は流れて中学を卒業した。

そして今日は高校の入学式。

「行つてきます」

誰もいない家で呟いて俺は家を出た。

高校は距離で選んだから通学は楽勝だ。それに友人も多い。

「よお聖也せいや新学期なのに一人か？」

「うるせー直哉なおやお前こそ一人だろうが」

こいつは小学校からの友人の直哉。鈴木 直哉だ。

「なんだよ折角声を掛けたって言うのに……」

ありがた迷惑だと思いながらも一緒に登校する。嫌なやつではない。

「・・・もう慣れたか？一人暮らし」

「心配するな、もう慣れてるよ」

俺の両親は去年の夏に離婚した。それで俺はこの家に一人が残るこ
とになった。

「金が入ってくるから生活には困らないしな。」

「あーそっか・・・ところで部活はやらないのか？」

「部活？面倒だからやらないよ・・・」

「お前・・・まだ去年の試合のことを気にしているのか？」

「あれは関係ないよ、普通こつという話の主人公は部活やら無いだろ
？」

「なんだそれ？こつという話？」

「作者の都合だよ」

そんな話をしている間に学校に到着した。

この学校はいたって普通の公立高校だ。割と校舎はきれいなほうだ
けど。

玄関の前には大きく新入生のクラスが掲示されていた。

「聖也ー今年も俺とお前は同じクラスみたいだ」

「マジかよ・・・勘弁してくれ・・・さすが小説・・・・・・・・」

「他にも凜ちゃんも一緒だぞ？」

「嘘だろ！？凜もかよ・・・」

「聖也ーわたしと一緒にじゃ嫌なの」

後ろを振り返るとうわさの凜がいた。

「いえいえ、滅相もございません。赤沢凜様あかざわつー！」

「よろしい、聖也」

凜とは古くからの付き合い。幼稚園のころからだったかな？

それがどうして今も続くんだ、さすが小説・・・・・・・・

そんなことを思いながら俺たちは教室へと向かった。

このときは思いもしなかった。

これから起こるさまざまな事件の中心が俺になることを。

こんな平凡な日常が一瞬で凄いことになることを。

そして「流れ星」に捧げた祈りは天に届くのだということ――

序章 新しい生活（後書き）

前書きはあまり今回の話とは関係ありません、第二話ぐらいの事です。

がんばろつとは思っているので皆さん応援お願いします！

第一章 星に導かれた奇跡（前書き）

何このサブタイトル、おかしくね？間違ってるね？

無駄にカッコいい気がするの気のせい？

ようやく話が進むからって・・・

第一章 星に導かれた奇跡

適当に入学式を終え、クラスに戻り自己紹介が始まった。

「このクラスの担任の上野だ〜よろしくな〜」

「こいつこれから空気だな・・・」

俺はそんなことを考えながら自己紹介で何を言うか考える。俺より先に直哉だが・・・

「じゃあ次、小川 直哉頼むな」

軽く返事をして前に進む直哉。果たして何を言うのだろうか・・・

「どーも！小川 直哉です！趣味はP C いじり！P S P いじりも大好きです！！特技はテニスです！よろしくお願いしますっ！」

俺は奴の馬鹿さつぷりを尊敬した。まさか初日から残念な子だって主張するとは・・・

直哉が軽く俺を見る。「期待してるぞ」と言っているようだった。

そして徐々に進んでいき・・・

「じゃあ次、鈴木 聖也！」

俺は覚悟を決めた。やるしかない・・・そう誓った。

「こんにちは鈴木 聖也です。普通の人には興味ありません、この中に宇宙人、未来人、超能力者がいたら俺のところに来てください、以上!」

やってやったぜ・・・涼宮 ハ ヒをぱくったぜ・・・

俺を知らない人からは全力で気色悪そうに俺を見る。

一部からは凄い尊敬の目で見られてるな・・・君達は同士だ。

そう思いながら堂々と席に座った。

そうして紹介が進み・・・

「じゃあ次は赤沢 凜!」

凜が前に進んでいく。凜の髪は長く真っ直ぐ腰まで下ろしている、色は黒だ。

「こんにちは、赤沢 凜です!えと・・・部活はテニスをやってました・・・それで・・・皆と仲良くできたらいいなって思います。よろしく願います!」

凜は人見知りだからな・・・こうやって見ると可愛いんだけどな、もじもじしながら凜は座っていく。こうして初日は終わった。

帰りは凜と直哉と一緒にだった。

「凜ちゃんはほんとに人見知りだな」

「だって・・・恥ずかしいもん・・・」

「俺にもそんな感じで接して欲しい・・・」

「なに？聖也、何か言ったかな？」

「・・・何でもないです・・・」

凜は友達になると急に人が変わるんだよ・・・

「じゃあ俺の家こつちだからじゃあな聖也、凜ちゃん」

「じゃあな」 「またね！」

角を曲がってあいつは歩いていく。

「やっぱり・・・部活やら無いの？」

「やらないよ・・・俺はもう嫌なんだ・・・」

「待つてるからね・・・直哉君も待つてるよ」

「悪いな、たぶんもう・・・」

そんなことを話しながら凜の家の前に着いた。凜の家は俺の家の二軒隣にある。

「うん・・・じゃあね！」

一人になったところで溜息を付いて家に戻る。

「テニスは・・・やりたくないんだよ・・・」

眩きながら家の前にいたその時――

人がいた。

知らない人が。

それは女の子だった。

三人の女の子がいた。

家の前で立っていた。

何故か運命を感じた。

ずっと前に会う約束をしていたかのように。

これが流れ星の奇跡だと気づいたのは随分後になってからだった。

「あの・・・俺の家で何を？」

「ようやく見つけた・・・」

「長かった、にゃあ」

「どんだけ長かったと思ってるのよ!」

長いようで短い時の中で聖也に新たな出会いが訪れる――

第一章 星に導かれた奇跡（後書き）

馬鹿なようにでまじめな話を書こうということで作ってみた今作。意外と悲しい感じな話も用意される可能性がありますが、基本は馬鹿です。安心してください。

更新は平日のこの時間だと思っています。見つけにくいなどの要望があれば夜に更新することも可能なので連絡ください。これからも応援よろしくお願いします！

新しすぎる新生活（前書き）

あの・・・俺の家の前に三人の女の子がいるんですけど・・・
どうしたんですかね？もしかして俺のファン？？
これからR - 15な話に突入するらしいです・・・

新しすぎる新生活

「それで・・・俺の家に何か用？」

玄関の前にいる三人の女の子に困惑する。

「家じゃなくて、あんたに用があんのよ！」

「俺？何で？？」

まさかこの子達。未来人、宇宙人、超能力者か？

「いいから、上がるわよ」

言われるがままに三人の女の子を家に上げる。

「とりあえず、皆の名前は？」

まずは、自己紹介が大切さ。そんな訳で名前を聞いてみる。

「アタシの名前は斉藤 綾香！よろしくね聖也君！」

この子は髪をポニーテールの黒髪で活発そうな印象を受ける。

ちなみに・・・上半身の発達は微妙……………

「何か変な事考えなかった？」

「そんなわけありません！！そっだ・・・君は？」

「私は越前 優奈よろしくにゃあ」

この子も黒髪だけど長い髪をストレートで降ろしている。

ちなみに発育はこの中では一番凄い・・・

「変な事考えたらだめだにゃあ」

何故だ・・・この子達は読心術を持っているのか！？

「アタシは三沢 紗枝、変な事しないでよね！」

「しないよ！そんな事・・・」

できる事ならしたいな

「変な事考えてるでしょ！この変態！」

この子達、マジで読心術の使い手だ・・・

「うん！そういうことで今日からこの家に住むからね」

「へ？俺の家に住む？何故？？」

「星の導きだにゃあ・・・」

「ん？優奈ちゃん何か言った？」

「なんでもないにゃあ〜」

後から振り返るとこの一言をちゃんと聞けばよかったと後悔している。

「んで、アンタに拒否権は無いからね！アタシの部屋はどこなの！？」

「何で拒否権無いんだよ！知らない人を三人も住ますなんて・・・」

ヨスガ ソラが見れないじゃないか！あんなエロアニメみたいな奴を！

「うん、我慢してね、聖也君。アタシの部屋は〜」

どうしてこんな事に・・・まあ後は作者の変態ぶりに期待しよう・・・

「あ〜うん、わかった・・・部屋はこれから分けるからね〜」

どうせ断れないだろうしな・・・

「ありがとう！聖也君！えい！」

綾香さんがいきなり俺の胸に飛び込んでくる。

いくら小さくても若干当たってますけど！？

「気にしないんだよ〜それと小さいは余計だからね〜」

やっぱ読心術の使い手か！！

まずは悟られないような修行をしなきゃ・・・

超展開＋急展開のこの小説の本題がついに始まります！

新しすぎる新生活（後書き）

聖也「作者よ、流れ星の奇跡って何なの？」

作者「ごめん、何も考えてない・・・」

聖也「は？お前馬鹿？伏線は最初から答え考えとけよ！」

作者「しょうがないだろ！思いつかないんだから！！」

聖也「だったら書くなよ・・・」

作者「勢い任せなんだ！大目に見てくれ！最後は超展開さ！」

聖也「もうすでに超展開じゃねえか！」

直哉「俺の出番は・・・」

作者「ごめん忘れてた、次はでるんじゃない？」

直哉「酷い！！」

作者「これから応援よろしくお願いします！」

第三章 お風呂に危険はつきものです (前書き)

前回第二章って書くの忘れてた・・・
あとで書いておこう・・・

第三章 お風呂に危険はつきものです

よく分からないまま三人の女の子が俺の家に泊まることになったらしい。

「何回も聞くけど何で俺の家なの？」

「色々あんのよ！アンタは黙って従えばいいの！この駄犬が！」

駄犬って・・・どっかで聞いたことあるけどまあいいや。

そんなわけでそろそろ夕飯の時間です。

「ところで飯どうするの？一通り食材は歩けど俺たいした物作れないよ？」

「私にお任せにゃあ」

「任せて大丈夫？優奈ちゃん」

「お任せを〜」

と、言うわけで優奈ちゃんに料理を任せて30分後・・・

「できましたにゃあ〜」

持ってきたのは定番の？オムライス。

「おゝ美味しそういただきます」

「夫婦ですから料理は当たり前にああ」

俺はとろとろの卵をどろどろにひて噴出す。

「何言ってるの！？夫婦って何！？」

「同棲してるんですもん当たり前にああ」

「何言ってるの！夫婦なのはアタシだよ！」

「ここまで空気だったくせに何言ってるの！？綾香ちゃん！？」

「アンタらばっかじゃないの・・・」

よかった・・・紗枝はまともだった・・・

「そう言ってゝ本当は大好きなんですよ？聖也君が」

綾香ちゃんがからかうと・・・

「そんなわけ・・・ないじゃない・・・誰が・・・そんなこと・・・

」

「「「あるんだ!!!」」」

きつとこのとき俺ら三人は同じ事を思ったはずだ。

そんなこんなで楽しい？夕食は終わり・・・

「風呂の準備できたけど誰から入る？」

「聖也君から入っていいよ」

「わかった、じゃあ先入るね」

綾香のお言葉に甘えて先に入ることにする。

「後で のみぞ知るセカイでも見よう・・・」

そんなこんなで俺は風呂に入る・・・

こうなれば読者の皆さんはもうお分かりですね！

風呂に入って三分後・・・

「聖也君～～！」

「おじゃましますにゃあ」

「別に・・・私は入りたいわけじゃないんだから！」

皆さんそろって突入してきました！

しかし読者の皆さんと違ってパニックになった俺は・・・

「皆して何してるの！？新手の馬鹿ですか!？」

「むゝ馬鹿なんてひどいにやあゝ」

「さて・・・覚悟してね？」

あの・・・綾香さん・・・怖いです・・・

「ありとあらゆる所を洗ってあげますからねゝゝ」

「どこまで洗うの!？」

「玉とか・・・そっち方面・・・」

綾香ちゃんが壊れつつある!!

(この話次まで続きます)

作者の声が聞こえる!死ねばいいのに!あの糞野郎が!

「さて・・・こないだのヨスガ ソラ見たくお風呂で行きますか・・・」

「や・・・やめてくれゝゝ!!!!」

お楽しみはこれからです

第三章 お風呂に危険はつきものです（後書き）

聖也「やりたい放題だな・・・」

作者「俺も思った・・・」

聖也「この話って一話でいいだろ!!」

作者「ごめん！ノリで」

聖也「こんな奴ですがこれからもよろしくお願いします」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3605o/>

流れ星にハーレムの祈りを

2010年11月14日02時29分発行